



(倉吉)

地域は東西約一七〇m、南北はそれ以上と推測され、伽藍配置は観世音寺式の可能性がある。山陰最古級の

鳥取・大御堂廃寺

1 所在地 鳥取県倉吉市駄経寺町上湯原

2 調査期間 一九九六年(平8) 一一月

3 発掘機関 倉吉市教育委員会

4 調査担当者 森下哲哉・根鈴智津子・岡平拓也

5 遺跡の種類 寺院跡

6 遺跡の年代 七世紀後半～平安時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

大御堂廃寺は鳥取県中央部を日本海へ北流する天神川とその支流小鴨川に挟まれた、西方に打吹山を望む標高一六mの沖積平野に立地する。ほぼ真西に伯耆国府が位置することから、大御堂廃寺の南には国府へ続く古代の官道山陰道の存在が推定されている。

寺域は東西約一七〇m、南北はそれ以上と推測され、伽藍配置は観世音寺式の可能性がある。山陰最古級の

本格的な寺院であり、川原寺式軒瓦の他、埴仏・塑像・佐波理匙・仏具の鋳型などが出土している。出土墨書土器によると、郡名を負う「久米寺」と考えられる。

今回の調査は、倉吉パークスクエア建設事に伴うものである。寺域区画内については、史跡公園として整備することを目的に、一九九六年度から三年間の予定で範囲確認調査を継続中である。

今回検出した木簡は、墨書のある木簡である。木簡は寺域中心部から西へ約一八〇m離れた地点から、東西方向に長さ八六mにわたって埋設されている。今回、寺域外西側の木簡西端から六二m分一二本の調査を実施した。木簡は調査区内の東西で一八cmのレベル差があり、自然湧水を利用した東の寺域内への導水施設であることがわかった。

木簡を設置した際に下にかませてあった軒丸瓦や掘形内の土器は七世紀末～八世紀初に比定されるが、材の伐採時期は年輪年代の測定結果から五九六年以降と特定された。削り落とされた辺材(白太)部分の年代を加算すると六六〇年頃の年代が推定でき、寺院創建段階から木簡の設置が計画されていたと考えられる。

寺域東限付近の溝SD〇一から墨書土器が約一六〇点出土している。主なものに、郡名寺院を示す「久米寺」とその省略の「久寺」、吉祥字「吉」「福」の他、「浄私」「浄」「東」「印」などがある。

8 木簡の釈文・内容

(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
〔巳〕	〔卯〕	□	□	□〔未カ〕	□〔子カ〕	〔一〕	〔一〕
(木樋 No. 11 蓋)	(木樋 No. 9 身)	(木樋 No. 6 身)	(木樋 No. 5 身)	(木樋 No. 5 蓋)	(木樋 No. 4 身)	(木樋 No. 3 身)	(木樋 No. 3 蓋)
190	190	190	190	190	190	190	190

一辺約一五cmの杉の角材(二方桁)を縦に裂き割って蓋と身に分け、両端に継手を作りつけて導水部分を削り抜いている。一端に柄穴を、もう一端に突起を作る追廻継で、接合順を変えることはできない。一本の長さはばらつきがあるが約五・六mで、保存状態は非常に良好である。

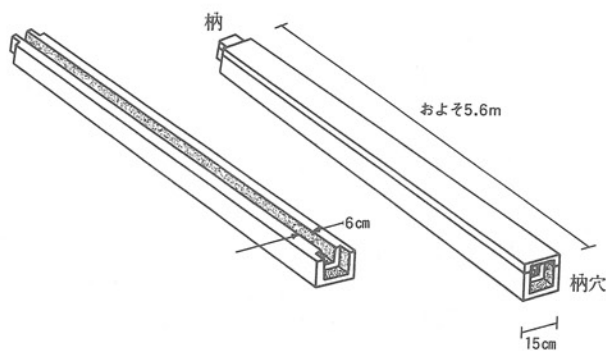
墨書は一二本中六本の柄穴側の右肩隅部に、番付様の符号が一字ずつ、蓋上面に三カ所、身側面に五カ所、計八カ所観察された。蓋と身を合わせるための印か、木樋を連ねる順序を示すものであろう。

9 関係文献

倉吉市教育委員会「鳥取県倉吉市大御堂廃寺」(日本考古学協会『日本考古学年報』四九 一九九八年)

(根鈴智津子)

木樋形状模式図



墨書部分模式図

